

提供組織の差異にみる書物空間の現状と考察

—国立駅周辺の調査から—

中西日波* (fond.3h@gmail.com)

*紀伊國屋書店

1. はじめに

“書物が在る空間”と言うと、大抵の人が思い浮かべる場所は恐らく書店や図書館である。同じように“出版”と言うと、出版社で企画・編集され、書店や図書館で手に取られるまでを想像するだろう。しかし書店でも図書館でもない空間で従来の“出版”の流れから外れたところでも案外書物は人の間を行き来している。近年、新たな“書物が在る空間”として話題である私設の図書室「マイクロ・ライブラリー」¹や「ブックカフェ」もこれにあたる。

本研究は書店や図書館以外の“書物が在る空間”にも目を向けることで、従来の“出版”という言葉が指す範囲に留まらない広い意味での“書物と人との間”を調査することを目的としている。

今回は書物提供を実施する空間の中で、「書物を主として扱い書物提供を実施する空間（書店や図書館など）」と「書物を主として扱わないが書物提供を実施する空間（待ち時間用に書物が用意された美容室や病院など）」という異なる提供組織を対象に提供状況の差異に着目した。なおこれ以後「書物提供を実施する空間」という意味で「書物空間」という造語を使用する。

2. 研究方法

「書物を主とする書物空間」と「書物を主としない書物空間」が似た条件で比較可能な状況として、執筆者がメンバーとして参加していたコミュニティスペース「国立本店(くにたちほんてん)」²にて企画・運営した展示「書採集」、展示販売「本屋採集」を取り上げる。

2つの企画を含め、これまでに取り組んだ「書物が在る空間」を対象とした4つの研究がある。2015年の卒業論文からはじまり、展示「書採集」、研究誌「図書館総合研究」掲載論文、展示販売「本屋採集」へとつながる。2.1～2.4に4つの関係を説明すると共にそれぞれの研究についてももう少し詳細な情報をまとめておく。

2.1 2015年度専修大学文学部人文ジャーナリズム学科卒業論文「第三の場における書物役割～現代のコミュニケーション問題における”共生策”～」

[実施年月日] 調査期間は2015年12月23日～29日。提出は2016年2月。

[執筆者] 本稿に同じ。

¹ 個人や小規模な運営団体によって、書物をきっかけに他者とつながる場として書物を閲覧・貸出する“小規模な図書館”。(参照：まちライブラリー/マイクロ・ライブラリーサミット実行委員会 2014編『マイクロ・ライブラリー—人とまちをつなぐ小さな図書館』学芸出版社、2015)

² 有志のメンバー30名程度によって運営されるコミュニティスペース。施設運営だけでなく、「本」や「国立」に関する自費出版やイベント等も企画する。発表者は2015年9月～2017年8月までメンバーとして参加していた。

<http://kunitachihonten.info/> (2018.1.10 確認)

[内容] JR中央線国立駅から半径300m以内に存在する”第三者が日常的に立ち入り可能な全ての空間”を対象としてヒアリングを行った。まずは販売、貸出、閲覧など何らかの方法による「書物提供の有無」を空間の運営者に確認した。

提供が確認できた施設では「1. 提供書物の種類 2. 提供方法（販売、貸出、店内閲覧、店内装飾など） 3. 提供目的（待ち時間用など）」の3つの質問事項を設け、さらにヒアリングを実施した。

結果、過半数である162/305店舗に多種多様な書物提供を確認できた。これらの多くが飲食店や美容院、銀行や病院など日常的に利用する空間である。中には「捨てるに捨てられないから持ってきた」など、提供している書物が利用されるかは“無意識”ともいえる書物提供もあった。この思いがけない“無意識”の発見が次の展示企画「書採集」と「本屋採集」へ繋がっていく。

2.2 展示「書採集」

[実施年月日] 2016年8月19日～8月28日

[企画・運営] 国立本店

[内容] 2.1の論文で調査した書物提供が行われている空間のうち、国立本店のメンバー有志で選んだ9店舗に対し1時間弱のヒアリングを実施した。ヒアリングには執筆者に加え国立本店のメンバー数名が同行し、内容は書物提供に至った理由を中心に会話形式で行った。これを元にキャプションとしてパネルを作成し、実際に提供されていた書物をお借りし一緒に国立本店店内で展示した。その際に提供状況を一言で表して分類した。

2.1の論文からさらに深くそれぞれの提供状況の背景を調査することで、時代による書物の流通や個人のライフステージの変化と共に「書物との関わり方」も変化し、その為に多種多様な書物提供が生まれていることが明らかになった。

2.3 「図書館総合研究第17号」より「“無意識的”な書物提供からみるマイクロ・ライブラリーの今後の展開～JR国立駅周辺の個人による書物提供状況のヒアリング調査～」

[実施年月日] 2017年5月執筆。8月刊行。

[執筆者] 本稿執筆者中西、専修大学文学部野口武悟教授、植村八潮教授

[内容] 提供者が提供している書物が利用されることに対して”無意識的”か”意識的”かに着目し、2.1の卒業論文と2.2で述べた展示「書採集」を対象に考察した。

卒業論文では提供者側が利用に対して「意識的な提供」と「無意識的な提供」があること、展示「書採集」では、1つの空間の中でも「意識的な提供」と「無意識的な提供」は混在していることが分かった。また「無意識的な提供状況」の背景には、必要で入手したが時が経つにつれて不必要になりそれでも「捨てるに捨てられない書物」の存在があった。これらは結果的に個人史や家族史を反映している。

マイクロ・ライブラリーの今後としては、2つの研究で見た多くの空間のようにマイクロ・ライブラリーだという自覚なく書物を提供している既存の空間を生かすやり方も考えられる。例えば「捨てられない書物」を逆手にとって書物に個人史が現れていることを魅力として捉え、書物を捨てずに生かせる空間としてのマイクロ・ライブラリーもあってもいいかもしれない。

2.4 展示販売「本屋採集」

[実施年月日] 2017年8月19日～8月31日

[企画・運営] 「国立本店」

[内容] 「書物を主としない空間」を調査した卒論、それをもとに企画・展示した「書採集」とは対になるように、今度は国立駅周辺の「書物を主とする空間」である書店や図書館などに声をかけ、書物を展示販売した。

参加したのは新刊書店、古本屋、図書館等の計10店舗。4つのテーマに沿って選書してもらい委託の形式で書物を預かり販売した。

売り上げは100冊弱。新刊はあまり売れず古本の方がよく売れた。卒業論文と展示「書採集」で述べた「無意識的な書物提供」と比較すると、プロが意思をもって選んだ書物が”小さな本屋群”となって並ぶ様子は圧巻であった。この企画を実施した理由に、「一つの街の書物の営み」を俯瞰してみたかったというのがある。国立駅周辺では出版社、古本屋、新刊書店、図書館が徒歩圏内の同地域に存在しているが、交流があまりないことが分かった。裏を返せばこの企画をきっかけに参加店舗同士が知り合うことにもなった。

3. 研究結果

展示「書採集」の協力店舗である「書物を主としない書物空間」＝国立駅半径300mに在る主に運営の主な目的ではないが書物を提供する空間をAと表記し、展示販売「本屋採集」の協力店舗である「書物を主とする書物空間」＝国立駅周辺に在る主に運営目的として書物を提供する空間をBと表記して3.1で比較を行った。

比較項目は協力店舗の基本情報に加え、通常営業中の書物提供状況と展示中の書物提供状況それぞれから11項目挙げた。

3.1 項目別の比較

①展示協力店舗数／調査数

A：9店舗/162店舗※2.1の調査で書物が在った162店舗から特徴的な施設を展示場所に合わせ抽出。

B：10店舗/12店舗※国立駅を最寄りにするBの条件を満たし交渉した店舗が12店舗。そのうち協力店舗が10店舗。

<比較> Bの交渉成功率は高い。同地域でBよりも、Aの方が圧倒的に多く存在する。

②展示協力店舗の形態

A：塾、音楽教室、靴屋、美容室、カフェ、そば屋、おもちゃ屋、囲碁クラブ、手芸店

B：新刊書店2店舗、古本屋2店舗、古本&カフェ&ギャラリー1店舗、新刊&古本ギャラリー1店舗、無店舗の古本屋2店舗、出版社1社、図書館1館

<比較> 飲食、サービス、小売とAの業種は多様である。Bもまた同じ書店の中でも新刊と古本があり、他業種との複合型書店もある。図書館・出版社より書物の販売を目的とした書店が多い。

③空間の利用者に対する意識

A：意識して提供されることもあれば、無意識であることもある。1店舗の中でも書物によって意識的

か無意識的かは異なる場合もある。

B：全ての書物が利用者に手に取られることを意識的に考えて提供されている。

<比較> Bには無意識的な書物提供がない。

④立地

A：駅から半径300m内に162店舗の書物提供空間が在る。駅前なので商業施設が密集している為、日常的に第三者が出入りする施設が多く、その分書物提供をする空間も多いと考えられる。

B：近距離に出版、印刷、販売、買取という出版流通の主要な役割を果たす空間が在る。

<比較> AもBも狭い範囲に多く立地している。Bでは互いの存在を知っているところは在ったが、関わりはほぼないと言っていい。

⑤創業年

A：全ての空間で正確な年月は調査していないが、創業50年から3年まで様々。

B：こちらも創業71年から1年まで幅広い。

<比較> Aで書物提供が実施されたのが創業年と同時かは不明だが、ヒアリングをしている限り創業年が古い店舗で最近あえて書物提供を始めたという話は聞かなかった。数十年前からAとBどちらの空間も存在していたと想定できる。

⑥提供方法（通常営業時）

A：閲覧（約7割）、貸出、販売、展示、譲渡など（右から割合が高い順）

B：販売、貸出、出版、閲覧（書店では販売が目的ではあるが、閲覧だけでも利用可能である。図書館はそもそも閲覧も目的のうちにある。）

<比較> Aでは販売がほぼなく、閲覧用という利用者がそこで滞在しながら利用することを想定している。つまり書物提供で直接的な利益をとっていないことが分かる。Bの書店でも閲覧されることは想定されているが最終的には販売し利益を得るといった目的がある。

⑦書物の種類（通常営業時）

A：多くは個人の所有物である古本。一般流通している新刊の販売はない。自費出版物の販売はあった。

B：正確に全ての蔵書を調査はしていないが新刊と古本と自費出版物。

<比較> Aに一般流通している新刊の販売がないことから、⑥でも述べたように出版流通のパイプがBにしかないことが分かる。

⑧書物の内容のジャンル（通常営業時）

A：絵本や雑誌など時間をかけないで読めるものが多かったがそれ以外のジャンルも多く、提供者の個性が反映されていた。

B：全般的に扱う空間も多いが洋絵本専門や、イスラーム・アラブ・アジア系専門などあるジャンルに特化した書店もあった。全般的に扱う空間の中でも徒歩圏内の同じ新刊書店であっても品揃えが良いジャンルは異なる。

<比較> Aの中で書物の内容としてのジャンルを全般的に揃えようとする空間はなかった。Bには「特定の書物を探す利用客」が存在する。その為に品揃えを良くすると考えると、Aの提供書物のジャンルの揃え方からはBのように「特定の書物を探す利用客」を想定していないことが分かる。

⑨蔵書量（通常営業時）

A：数冊から400冊程度まで。

B：正確には調査していないが、店の規模には差がある。

<比較> Bの空間より在庫量が多いAの空間はない。AとBそれぞれの空間の中でも蔵書量に差がある。

⑩選書テーマ (展示中)

A：提供時の状態をなるべく表現する為、選書テーマは設けず企画の運営側が空間の特徴が現れるよう借用する書物をランダムに選んだ。

B：1店舗につき4テーマ「本当におすすめしたい本、本の本、夏の本、子どもの本」を設定、選書してもらった。

<比較> Aでは運営上主に扱う商材は他にあるにも関わらず書物を提供するにはそれぞれ何かしらの理由がある。その為、通常時の書物提供をそのまま表現出来れば個々の空間の特徴を伝えることができた。一方でBは書物を扱うことは空間の運営上前提であるので、書物の種類やその書物を選ぶ理由が個々の空間の特徴になる。

⑪一言提供タイプ (展示中)

A：提供に至った理由と提供状況を踏まえ、特徴を以下のように一言で表した。「好奇心系のびのびタイプ、こども向け自然派生タイプ、盛り上げ系コミュニケーションタイプ、深める系コミュニケーションタイプ、ゆったり系別世界タイプ、本好き奥さんの日常と思い出タイプ、お国の違いをエンジョイタイプ、おとな向け自然発生タイプ、ワケあり手芸ならではのタイプ。(②の空間の種別で記述した順に適応)」

B：書物提供がそもそも前提となっている空間である為、提供タイプを一言で表すことはしなかった。

<比較> Bとは違い、Aのように書物提供が前提にない空間であると提供に至った理由、提供の目的が個々の空間の特徴として現れる。

3.2 まとめ

まず、A…展示「書採集」の協力店舗である「書物を主としない書物空間」=国立駅半径300mに在る主に運営の主な目的ではないが書物を提供する空間、B…展示販売「本屋採集」の協力店舗である「書物を主とする書物空間」=国立駅周辺に在る主に運営目的として書物を提供する空間、の現状をまとめる。

3.1の項目④⑤からは、AとBは国立駅周辺という近距離で、数十年前から共存していたと想定できる。②蔵書数からは店の形態が多様であると同時に書物提供の多様さも伺える。そして①からBよりも、Aの方が圧倒的に多く存在することが分かる。ただしAの空間を利用する際に必ず書物が利用されているとは限らない。

③利用者に対しての意識に関しては、卒業論文や「図書館総合研究」掲載論文で指摘したようにAで見られた、利用者に対し“無意識的な書物提供”がBにはないことが分かる。Aの書物提供方法で一番多かったのは「閲覧」であることから分かるようにAでは書物提供が直接的な利益をもたらしてはいない。空間の利用者が提供している書物を利用しないことを許容する“無意識的な書物提供”は、書物を直接的な利益目的で提供していないAならではの特徴だと考えられる。

⑦提供書物のジャンルでは、Aに一般に流通している新刊の販売がなかった。⑥提供方法の比較でも述べたように出版流通のパイプがBのように「書物を主とする空間」にしかないことが伺える。国立駅

周辺では新刊の販売は書店のみで行われている。

⑧書物の内容としてのジャンルでは、AでBのように全般的に揃えようとする空間はなかった。これは「特定の書物を探す利用客」の存在が関係するのではと考える。Bではこの顧客のニーズに答える為、品揃えを良くするが、Aではそもそも書物を提供していることを広報している空間がなかった。⑨で記述したAの数十冊～数百冊の蔵書量から考えてもAに「特定の書物を探す利用客」は訪れないことが分かる。

⑩展示の際の選書テーマや⑪提供タイプからはAとBでは同じ書物提供でも個性が表現される部分が異なることが分かった。Aでは書物提供が前提にないため、提供に至った理由、提供の目的が個々の空間の特徴として現れる。一方でBは書物を扱うことは空間の運営上の前提であるので、書物の種類やその書物を選ぶ理由が個々の空間の特徴になる。

4. 考察

国立駅周辺の書物空間の状況として、狭い範囲の中で「書物を主とする書物空間」と「書物を主としない書物空間」が多数存在し、多様な書物提供状況を繰り返していることが分かった。しかしそれは知られる機会がなく、書物空間同士が関わることもこれまでなかったと思われる。

現在の書物空間の状況を踏まえて、幾つか“書物と人の空間”の今後の方向性を考えたいと思う。

まず1つに、例えば長野県小布施町の「まちじゅう図書館」³というプロジェクトがある。他の地域の書物空間の状況が国立駅周辺と同様かは不明であるが、少なくとも国立駅周辺ではわざわざ書物を新たに設置しなくとも既に“まちじゅう”に書物空間があり、このような企画も各空間の許可さえ取れば案外実施可能なのではないだろうか。

2つ目に「書物を主としない書物空間」で新刊の販売が可能であれば「新たな出版の販路」として広がるだろう。書物空間側としても販売によって少しでも利益になるとしたらメリットになる。ただ、販売に伴う取引や管理手間が余り煩雑であると普及するのは難しいだろう。「販売」する書物を現在のように「閲覧」提供し続けるとすると、特に子ども対象の書物空間などで書物の状態が“売り物”にならなくなってしまいう可能性もある。また、提供者の「個人史が表れている書物提供」を新刊に取って換えることはできない為、新刊の販売による書物提供はそれとはまた別に「個性の表現」と「空間に新規の利用方法を付与」する役割をメリットと受け取ることができる空間に限って実施可能だと考えられる。

3つ目に「書物を主とする書物空間」の中に一部“利益を目的としない書物空間”を設置することも「個性の表現」と「空間に新規の利用方法を付与」する役割として有効だと考えられる。書物を目的に訪れる利用者が大半の空間で、書物を生業とするプロのパーソナルな書物との関わりが垣間見えたら、注目する利用者は多いのではないか。直接的な利益にならなくても提供者と利用者の個人間の繋がりが濃くなると考えれば、地域の人をターゲットに商売をする際にはメリットになるはずだ。

最後に、本稿で研究対象とした2つの展示企画を実施した「国立本店」では運営メンバーが選書する本棚を設置してはいるがそれで利益は取っていない。自費出版物の販売は以前から行っていたが最近で

³「おぶせまちじゅう図書館」

複数個所の個人宅や店舗で訪問者が手に取ることができる小さな本棚を設置し、一つの街全体が図書館だとするプロジェクト。（<http://machitoshoterrasow.com/pg675.html>(2018.1.10 確認)

は一般流通する地域出版社の書物の販売も始めた。また執筆者は最近、吉祥寺のカフェ&アトリエ「カフェトリエ」⁴では「間借り本屋」を始めた。この空間ではカフェとして機能する店内に6人がそれぞれ“店主”として古本や新刊を選書し販売するスペースを設けている。“店主たち”は空間の所有者として空間に常駐している訳ではなくスペースを借りているという意味で“間借り”している。

これら二つの空間では「書物を主とする書物空間」と「書物を主としない書物空間」の線引きが難しい。しかしこういう空間にこそヒントがあると思う。書物提供は利益をとる方法も利益をとらない方法どちらでも実施できる。提供者の個性を表現し、空間の利用方法を新たに付与することができる。個人間・地域間を繋げることができる。出版・個人・地域の新たな在り方を示す存在として書物による“ちょっとしたサードプレイス”は可能性を秘めている。

参考文献

- まちライブラリー/マイクロ・ライブラリーサミット実行委員会 2014 編/磯井純充他著. (2015). 『マイクロ・ライブラリー—人とまちをつなぐ小さな図書館』. 学芸出版社.
- レイ・オールデンバーグ. (2013). 『サードプレイス—コミュニティの核になる“とびきり居心地のよい場所”』. みすず書房.
- 中西日波. (2016). 「第三の場における書物役割～現代のコミュニケーション問題における”共生策”～」. 2015年度専修大学文学部人文ジャーナリズム学科卒業論文（未公刊）.
- 中西日波、野口武悟、植村八潮. (2017年). 「“無意識的”な書物提供からみるマイクロ・ライブラリーの今後の展開～JR 国立駅周辺の個人による書物提供状況のヒアリング調査～」. 図書館総合研究第 17号.

⁴ 「カフェトリエ」吉祥寺駅徒歩10分程度の場所に位置するカフェ&アトリエ。2017年10月にオープン。3つの曜日代わりのコーヒースタンドと6つの間借り本屋が同一空間にある。アート、美容など様々な講座も実施するカフェ&アトリエ。 <http://cafetelier.net/> (2018.1.10 確認)